

ソーシャルメディア利用のリテラシーと 倫理に関する研究

—量的調査にもとづく「リスク意識」と「感情的配慮」の分析—

有元 翔

目的と方法

本論文の目的は、「ソーシャルメディア上での適切な情報発信」に必要なリテラシーや倫理とは何か、それらが身につけている人やそうでない人の傾向を明らかにすることである。本論文では「ソーシャルメディア上での適切な情報発信」とは、「ソーシャルメディア上で、他者とトラブルになり得ない情報発信をすること」と定義している。「リスク意識」を持っている人や、「感情的配慮」ができる人のほうが、「ソーシャルメディア上での適切な情報発信」をしていると考えられる。これを、質問紙調査にもとづく分析から明らかにする。

立命館大学大学院社会学研究科 Global Project で行った「生活と意識調査」のデータを分析する。2015年9月にインターネット調査として実施され、調査対象は日本全国の20歳から49歳までの男女で、回収数は2,939人である。そして「ソーシャルメディア上での適切な情報発信」に必要なリテラシーや倫理が、どのようにして身につけていくものなのかを示すことが目的である。

第1章 研究の背景と目的

マスメディアからの情報を受信することしかできなかった20世紀、「メディア・リテラシー」を身につけておくべきと言われてきた。21世紀に入り、インターネットが登場したことで、私たちは情報を受信するだけでなく、広範囲に発信することが可能になった。しかし一方で、ソーシャルメディアでの情報発信における問題も発生している。マスメディア事業者が情報発信を行う上で「倫理」を定めてきたように、誰でもソーシャルメディアで情報発信ができる時代において、ソーシャルメディアのリテラシーだけでなく、「倫理」も求められていると言える。

第 2 章 先行研究

「マスメディア倫理」は、情報発信を行う上で「リスク意識」を持ち、「感情的配慮」を行うために定められていると考えられる。間違った情報を広げてしまうことや、情報を発信することで人権を侵害してしまうといった「リスク」を避け、情報の受け手や取材対象者に不快感を与えないように配慮していると言える。そして、インターネットの情報に関わる「情報倫理」という概念が存在する。情報倫理は従来、「情報の送り手の安全」と捉えられてきた。

メディア・リテラシーのみならず、「リスク意識」を持っている人や、「感情的配慮」ができる人のほうが、「ソーシャルメディア上での適切な情報発信」をしていると考えられる。これをリサーチクエスチョンとし、分析から明らかにする。

第 3 章 調査分析

最初に、因子分析を行う。ソーシャルメディアを利用する上での「リスク意識」や「感情的配慮」に関する因子を取り出すことを目的としている。次に、主成分分析を行う。各ソーシャルメディアに関する変数のデータの縮約という目的で使用する。そして次に、重回帰分析を行う。因子分析によって取りだされた因子が、ソーシャルメディアを利用する上で適切・不適切だと考えられる行動の要因になっているのかを明らかにする。また、同じく重回帰分析を用いて、因子の要因として、特定の属性やインターネット上でのコミュニケーションやマナーに関する教育を受けた経験、メディア機器の使用年数、各ソーシャルメディアの利用頻度などによる影響の有無を明らかにする。「リスク意識」を持っている人や、「感情的配慮」ができる人のほうが、「ソーシャルメディア上での適切な情報発信」をしている、と仮説を立てている。

分析の結論として、仮説は支持され、「リスク意識」を持っている人や「感情的配慮」ができる人のほうが「ソーシャルメディア上での適切な情報発信」をしている傾向にあることが明らかになった。また、「リスク意識」や「感情的配慮」は、男女別で言えば女性のほうが「リスク意識」や「感情的配慮」が身につけている傾向にあった。そして、加齢とともに自然と「リスク意識」や「感情的配慮」が身につけていかない傾向にあることも明らかになった。そして、パソコンや従来型の携帯電話といったメディア機器の使用年数が長い人や、オープンなソーシャルメディアの利用頻度が高い人が身につけている傾向にあると明らかになった。

第 4 章 結論

分析から、「リスク意識」を持つ人や「感情的配慮」ができる人のほうが「ソーシャルメディア上での適切な情報発信」をしている傾向にあると明らかになった。つまり、「ソーシャルメディア上での

適切な情報発信」には「リスク意識」や「感情的配慮」が必要だと考えられる。「リスク意識」や「感情的配慮」は男性よりも、ソーシャルメディアの利用時間が長い女性が持っている傾向にあり、年齢を重ねることで身についていくものでなく、メディア機器の使用やオープン度の高いソーシャルメディアの利用を通して経験的に身についていくものであると言える。